
姫の復讐の果てに

異崎翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫の復讐の果てに

【Nコード】

N7671U

【作者名】

異崎翔

【あらすじ】

八年前、私はたまたま出会った大人びた風貌をした彼に告白をした。しかし、すぐに玉砕。おまけに「僕は君が嫌いだ」ときた。これはもう復讐するしかない。私は頑張りに頑張って、実力で権力者にまなった。

しかし、あのクソ親父——王が、彼の国へと嫁げなんて言い出した。アンチヒーローな女主人公が復讐のために頑張りつつ復讐相手に惹かれていく話し。

プロローグ

彼は、とても美しい風貌の持ち主だった。

町を歩けば女性十人中十人が振り返るような、とても美しく、格好のいい風貌の持ち主。

まだ十歳にしては、完成されたような顔。

少し幼さはあれど、口調も大人っぽく、行動の一つ一つが私とは全てが違う気がした。

ゆえに、私は彼に惹かれたのだ。

彼は隣国の第二王子。

私はリフェエラ国第三王女。

それは私が当時知らなかった情報だったのだけれど。

似たり寄ったりの境遇のなか、私達は町の祭で出合った。

王宮の侍女たちの目を盗んで、私は初めて祭というものに参加した。そのときにたまたま出合ったのが彼だった。

一見冷たそうなスカイブルーの髪と瞳。

大人びた口調。声。

すらっとのびた鼻。

まだ幼さの少しだけ残っている、彼の顔。

その、全てに惹かれた。

祭が終わると、彼は私に言った。もう、お別れだ、と。

そのとき勢いあまって私は

「私はレインが好き！」

なんて、突拍子もなく言ってしまったのだ。

レインは彼が名乗った名前。

そして彼は私の言葉に驚いたように目を見開き、すぐに返した。

「僕は嫌いだ」

と。

そしてすぐに二人はわかれ、私は王宮に帰ると一人ベッドの上でわんさか泣いた。

目のはれて前が見えなくなるほどに泣いた。

ベッドで独り泣いていると、心をえぐるような声が部屋に響いた。もう、なんといっていたのかは忘れてしまったけれど。

そのとき、私は決意したのだ。
必ず、彼に復讐する、と――。



あれから八年。

私は17歳。彼は18歳という年齢をむかえた。

そして私は復讐するべく、兄と姉を追い越して情報網をはらせ、国では唯一の、実力でのし上がってきた権力者となった。

王の座なんてどうでもいい。

ゆえに王の座を迫害するという脅しにも乗らなかったし、むしろ勝手にすれば？のような態度をとっていたので、そこらの大臣達には手のつけようがなかった。

復讐のために頑張っていた私だったが、なぜか民衆からの支持が高いことには困った。

民は皆、私の顔を覚えていて、動きにくいったらありやしない。

そのため、私は自分の組織に近いものを組み立てた。

口が堅く、信頼のできるものを集めた。

私の情報網は、王には劣るかもしれないが、その次くらいにすごいと自負している。

だが、その王に計画を狂わされた。
王は私を前に、

「お前はクシェラード家に嫁げ」

と。

クシェラード。それは隣国の……つまりはあの憎きレインのいる国だ。

「あなたは正気ですか、王」

プロローグ（後書き）

この作品を目に留めていただきありがとうございます。

なんかスミマセン。主人公復讐に身を燃やしています。

こんなのが恋愛？と思った方、たくさんいるでしょう。そのうち恋愛になると思います（たぶん）

もしよろしければ、見放すことなく読んで下されば……。はい。よろしく願います。

これもう、R15じゃね？とか、もっとうしろしたほうが、とか思っただ方、教えてくださいなれば幸いです。
ではっ！

出 発

クソ親父——王に嫁げと告げられて一日がたった。

最初はかなり反発もしていたのだが、いきなりカミングアウトされたのがこれだ。

『嫁ぐとは言ったが、正式に妻となるのではない。側室と正室などを厳選するための、一ヶ月の期間だけクシェラード国にいけないのだ。ついでに正当な王妃となった身分を返してくれるとなお嬉しい』

お前の感情なんて知ったことか。嬉しいってなんだよ。私はそういうおうと思ったが、一ヶ月の期間あちらにいるだけなら別に良いだろう。

適当に嫌われて国へ帰り、私の幼かった頃のピュアで真っ白なハートを黒く染めたレインに復讐を完遂させればいい。

我ながら図太い神経だとおもう。

私は、彼への復讐のためにたくさんのことを犠牲にしてきた。

年頃の娘となればやりたいことの一つや二つや三つや四つや——あるだろう。

しかし私は彼を見返すこと、いや、復讐をとったのだ。

復讐をしても良いことなどない。

最後に残るのは後悔と悲しみだけ。

そんなことはわかっている。
でも、したかったものは仕方がない。

私は専属のメイドによく言われる。

『お嬢様は変なところで頑固ですね』

と。

メイドが主人にそういうのはどうかと思うが、むしろ彼女はメイドよりも姉に近い存在だ。

私の組織の者にも言われたことがある。

『ルキア嬢は恋愛をされないのですか』

するわけがない。

昔して玉碎したのだ。もう私の心は立ち直すことはできないだろう。
彼に復讐を果たすまでは。

——だから私は悪役でいい。

復讐を目標にした主人公なんてどうかしている。

主人公は綺麗な恋愛をして、幸せに暮らしていればいい。

私の邪魔は、誰にもさせない——。



私は隣国とはいえ、馬車で一日以上かかる国へ行くのだ。

それなりの準備はしておかなければならないと考え、服や個人情報
の載っている手帳や組織の構成を確認しつつ、連れて行く御付を厳
選していた。

服は私の専属メイド、レイナに任せれば良い。

彼女は少しだけ元の茶髪に淡い赤毛の混じった、鮮やかな色合いの
髪をもっている。いつも丁寧な話し方をしているが、彼女の黒い瞳
はつねに現状を楽しんでいるようだ。

彼女を専属にしたのは私で、仕事も難なくこなせるし、小さいと
きから世話になっていて信用もできたから選んだ。

それになかなかセンスも良く、服選びとなればこれまた良いのを
選んでくれる。何でもできる人間だ。

まあ、そんなことはどうでも良いのだが。

私は御付を厳選した。

いや、するまでもなかったのだが、もちろんレイナと決定した。

他の者を落としたとはいえ、組織上これからも内通していくつもりだ。こちらの国の情報を厳かにするつもりはない。

あちらに行くのが一定期間とはいえ、それを狙って私を良く思わない一部の大臣達が反乱を起こしかねないのは事実。

——など色々と考え込んでいると、コンコンと扉をノックする音が聞こえた。

「どうぞ」

「失礼します」

入ってきたのはレイナ。

手にもたれているのはコンパクトに収納された服や日常品の入ったバッグ。

そして彼女は私を見てにこやかに言った。

「そろそろ念願のレイン様の国へと出発する時間です」

何文字か多い気がする。

「そろそろ出発の時間です、で良くない？」

「いえ、念願のレイン様の国、も必須です」

「絶対にいらないと思う」

「いえ、そこは譲れません。ルキア様が八年もかけて調べていたか

たのところへ嫁ぐのですから」

「…………私をいじめて楽しいか？」

「ええ」

うわ。即答した。

本当にこんな奴が私の側近でいいのだろうか。

そんなことを考えていると

「では、念願の——」

「わああああ！よし、出発しようかつ！」

「…………はい」

「なぜそこまでしょぼくれる！？」

彼女は私をいじめることに生きがいを感じていたらしい。

私は彼女と一緒に、馬車へと乗り込んだ。

計画は少し狂ったが、彼への復讐を遂行するために。

出発（後書き）

お気に入り登録してくださった方々、ありがとうございます！
皆様のおかげで日間恋愛ランキング22位を獲得できました！
自分からすれば、一話でここまでの人が認めて（？）下さったことは初なのです。これからも頑張りたいと思います！

補足。自分なりに主人公は男らしき満開（？）ですww

再会

馬車に揺られること約30時間。

腰は痛いわなんわで軽く不機嫌になりながら、私はクシェラード家の王宮へと足を運んだ。

王宮、と言ってもここに集まったお嬢様方は、一つの廊下がつながっているだけの、ある意味はなれともいえる邸で過ごす。母屋には正式な妻や、側室たちが入るのであろう。

この邸のような、離れにはすでに何十という若い女性が集まっていた。

それぞれ上品な服に身を繕い、上品そうな言葉遣いで話をしている。オホホホホ、とか言いながら笑っている女性も数名いた。

シンプルなデザインのこの邸。

主に白で壁や天井が色づけされていて、たまに飾ってある花や絵があたたかい雰囲気を出していた。

この邸は母屋から廊下でつながっているとはいえ、母屋とは全く異なる場所のようだ。

「皆さん」

不意に、女性の声が聞こえる。

見るとそこにはレインの母、ルシファークシェラードが立っていた。

彼女は金色の美しい髪を風になびかせ、優しい微笑みを浮かべて言う。

「お集まりいただき、ありがとうございます。今日から一ヶ月間という短い間ですが、その間に私の息子達が気に入ったお嬢様を各息子の正室、または側室とさせていただきます」

と、優しい口調で話した。

彼女が話し終わると、そこらじゅうから拍手がおこり、彼女はありがとう、と一言呟いてから、

「では、部屋の案内はこのメイド、ティファがご案内します」

隣のメイドを見ながら言った。

こげ茶の短い髪に、無表情な顔。

確か彼女は――。

私は記憶の片隅からティファ・リアーズという名前を引っ張り出す。

彼女は平民の出で、ルシファーに13歳のときに雇ってもらい、今では専属になる実力を持つ。

それしか彼女の情報はあがってこなかった。

「ルキア姫は、こちらの部屋になります」

彼女は私達を感情のあまりこもっていない声で、丁寧に部屋を案内した。

私とレイナは案内された部屋に入った。

少々小ぢんまりした部屋だが、二人で一ヶ月過ごすには問題のない部屋。廊下や天井と同じで、白い壁紙を主体とした、なかなかのセ

ンスの部屋。

窓が一つついてあり、そこに淡いオレンジ色のカーテンが揺れる。

私は一番奥にあるベッドに腰をかけ、はぁ、と一息ついた。

「お疲れ様です」

レイナが私に向かって白い紙を差し出しながら、笑顔でいった。

「…………私そろそろ仕事のしすぎで死ぬわ」

「その時はご一緒にします」

「…………」

私は無言で紙を受取り、内容を確認する。

紙にはこう、書いてあった。

大臣達に動く気配はなし。

引き続き監視を続行。

俺たち、ルキア姫が嫁ぐと聞いて驚きました。

王は超ご機嫌。

「知るかあっ！別に王の機嫌を報告しろなんて一度も言っていないわあっ！」

紙をビリッと破き、ゴミ箱に投げ捨てる。

私が叫ぶように言うとな度はレイナが

「私はルキア様が正室になられると信じております」

「ならないっての！何回言ったらわかるんだ……。私は復——」

復讐を果たせば、どうでもいい。そういうおうとした途端、目を見開いた。

閉めたはずの扉が開いていて。

それでもって何者かがこの部屋に入ってきていて。

……スカイブルーの髪と瞳に、大人びた顔立ち。細身なのに筋肉質な体。

八年前の幼さを残した顔ではなく、一人の男となった彼、レイン。

不覚にも見入ってしまった自分が恥ずかしい。

再会（後書き）

お気に入り登録、評価、ありがとうございました。

まさか自分の作品が二日目にして日間ジャンル別ランキングで9位を獲得できるとは…！

読んでくださっている皆さん、ありがとうございます！

レインの感情（前書き）

レイン視点です。

レインの感情

昔、八年前に俺はたまたま隣国の祭に参加した。

本来なら御付と一緒に行動するべきだったが、そのときはなぜかむしゃくしゃしていて、御付を振り切って祭りに参加した。

一時間くらいふらふらしていた俺は、そこで彼女を見つけた。

綺麗な漆黒の髪に、黒く澄んだ瞳。

そう、ルキア・リフエエラだ。

まだ幼いのに整った美しいとも可愛いともいえる顔立ちに、透けるような白い肌。

そんな彼女は俺の前に来ると、

「一人？」

と、小さな優しい笑みをこぼして問う。それに頷けば、

「本当？私も一人なの。一緒にまわりましょう？」

と、言った。

この国の姫が、一人？

俺は不審に思った。

姫が一人で外出などするはずがない。あるとすれば俺みたいに御付を振り払ったかなんかなのだろう。

もしかしたら彼女は、俺の存在を知っていて俺に話しかけたのかもしれない。

隣国の情報を手に入れようと。

……しかし、その疑いはすぐに消えうせた。

彼女はただ純粹に祭を楽しんでいたのだ。

そのことがわかると、俺は途端に気分が爽快になった。

彼女と笑い、話しながら祭を堪能した。

だが、仮にも一国の王子である俺が長時間御付から離れているのも危うい。

俺は祭が終わると同時に、彼女に

「そろそろ帰らなくてはいけない。もう、お別れだ」

と、告げた。

すると彼女はだんだん泣きそうな顔になって、俺に好きだと告白した。

驚いた。

まさか一国の姫が身分のわからない、それも会ったばかりの男に好きだと言うなんて思ってもいなかった。
それと同時に、嬉しかった。

最初はどうかあれ、ここまで一緒にいて楽しいと思えたのは彼女だけだったから。

が、そこで俺の御付がタイミング悪くこちらを見つけた。

もちろん奴らの見ているところで「僕も好きだ」なんていえない。

俺は拳を強く握り締めながら

「僕は嫌いだ」

そう吐き捨てて、背中を向けた。

悔しかった。

力のない自分が、無性に腹立たしくて。

それから俺は、勉学に励み、剣術を身につけた。

実力的には兄にも劣らないだろう。

あれから、今日という日まで八年。
長いようで短かった。

俺は側室と正室を決めるために女性をこの城に一ヶ月間滞在させることを聞きつけ、早々に手を打った。
ルキアがこれに参加してくれるように。

そのための努力は惜しまず、ルキアの父上、リフェエラ国の国王に何度も交渉をした。結果、彼は首を二つ返事で縦に振ってくれた。

嬉しかった。

またルキアに会えると思うと、嬉しくて嬉しくて仕方がなかった。

そしてやっと、彼女は我が国にきた。

俺は急いで彼女の部屋へ行き、扉の前に立った。

聞こえてくる彼女と彼女の御付の声。

俺はすぐに、ノックもなしに扉を開けた。中には赤毛の混じったメイドと、黒髪黒目の、美しい容姿をもった、捜し求めていたルキアがいた。

「私はルキア様が正室になられると信じております」

「ならないっての！何回言ったらわかるんだ……。私は復——」

彼女はそこで言葉を止め、こちらを見て目を見開いた。

……いま、側室にも正室にもならないといったのだろうか？
聞き間違いではないのだろうか。

彼女の方を見ると、彼女はすかさずベッドから立ち上がり、澄んだ声色で言い放った。

「初めまして。私隣国の第三王女、ルキア・リフェエラと申します」

大人びた口調で言った。

凜と澄んだ瞳でこちらを見据えた。

彼女は覚えていないのだろうか。俺のことを。

しかしずっと彼女の部屋で立ち尽くしているのも悪い。

「ああ。初めまして。第二王子レイン・クシエラードだ」

俺も動揺を隠して、挨拶をする。

レインの感情（後書き）

お気に入りに入れてくださった方、評価をしてくださった方、ありがとうございますっ！

まさか一日のうちに気に入り件数が百件こえるだなんて。夢のようです。

これから見放すことなく読んでくださると嬉しいです。

誤字、脱字などありましたら気軽にお知らせ下さい。

心（前書き）

ルキア視点です。

心

「ああ。初めまして。第二王子レイン・クシエラードだ」

彼は、こちらを見据えていった。
初めまして、と。

私は先程かまをかけた。

自分から初めましてと言ったのだ。彼が私のことを覚えているのなら、私はこの王宮で動きづらくなる。

忘れていてくれてほっとした、はずだった。
良かったと心から思う、はずだった。

でも、心がなぜかチクリと痛んだ。

私は猫をかぶるのが得意だ。
人を騙すのも得意。

今、私は彼に向かって笑んでいる。

しかし、この笑みがいつものように完璧なものではない気がする。
どこか歪んでいる。

そんな気がするのだ。

それを気取られたくなくて、私は問う。

「えっと、どのようなご用件だったのでしょか」

と。

早く帰ってほしくて。

早く私のぎこちない笑みをその瞳から逃がしてほしくて。

その問いに彼は答えた。

「……………午後の集会では、候補全員が自己紹介をする。内容を考えてきてくれ」

「わかりました」

「では、失礼した」

そういつて、彼は早々に部屋を出た。

ほっと、一息つく。

しかしなぜ、自己紹介ごときを説明するために私の部屋へきたのだろうか。

メイドに任せればすむことなのに。

するとコンコン、と窓をたたく音がして。

それにレイナがいち早く反応し、窓を開ける。

そこには、白い羽の、首に赤い首輪のようなものをつけた伝書鳩がいた。

このハトはルウ。

私と、国に残っている私の組織のハト。

ルウは首輪に埋め込まれた白い小さな紙を一枚くちばしで器用に取り出すと、レイナにわたした。

レイナはその紙を受取ると、新たにポケットから紙を取り出し、ルウの首輪に埋め込む。

「おねがいしますね」

彼女が言うと、ハトとは早々に飛んでいった。それを見送ったレイナが、私に白い紙を渡す。それを受取って私は、中の内容を確認した。

アルセイヌ伯爵　ルバーヌ男爵が手を組み、ルキア姫を落とそうと考える。

が、陛下がその思惑を潰したため、反乱の心配は皆無。

俺たちも手をつくしましたが彼らの思惑のトドメをさしたのは陛下。

陛下最高。

グシャ。

私は最後の一文字を読むと同時に、紙を握りつぶした。

「なにが『陛下最高』だ！私はあるクソ親父のせいでこんな所に

いると言うのに！」

私は叫ぶように呟いた。

それを見てレイナは

「しかしルキア様。彼らだけの力ではこの二人を穩便にこの世から消すことはできなかったでしょう。感謝するべきです」

「断る。勝手に手を出してきたのは王だ。感謝などはしない。……

…が、帰ってから御土産をあげるくらいはしてやるかな」

「…………素直じゃありませんね」

「やかましい」

私はぴしゃりとレイナに言って、午後の集会とやらに参加した。

心（後書き）

すみません。

第一話に書き損じがあったので、編集しました。

文字数は少ないですが、結構重要なことだと思うので、時間のある方は一話のみ読み返していただければ幸いです。

申し訳ありませんでした。

お気に入り、評価、ありがとうございます。

集会

午後二時。

私はレインの言っていた集会と言うものに参加するべく、邸の広間へと足を運んだ。

そこは結構な広さで、すでに三十人程の候補者達が大きなテーブルを挟んで向かい合わせに座っていた。
レインは一番奥の右端に。

その左隣には、レインの髪とは対照的な、明るいイメージを持たせる金色の髪の、爽やかな笑みでお嬢様と話している男がいる。
たぶん彼はレインの兄、フィオル・クシェラード。

そしてフィオルの左隣にいる仏頂面の、紺色の髪の少し幼そうな男は、彼の弟、クロード・クシェラードであろう。

フィオルは爽やかな、それでもって優しそうな感じ。

レインは冷たそうな印象。

クロードは楽観的な思考をもつ、とても扱いやすそうな……じやなくて、親しみやすそうな雰囲気。

それぞれ固有の雰囲気があれど、とても美形で三人が並ぶとそれはそれは絵になる。

不意に、フィオルが優しい、うさんくさい笑みを浮かべて話した。

「今日は皆さんに自己紹介をしてもらいたいと思います。まず、私はクシェラード国第一王子、フィオル・クシェラード。右隣が第二王子レイン。左隣が第三王子クロードです」

すると、自分の名前を言われるのにあわせてレインとクロードは小さくお辞儀をした。

次に、他のお嬢様方が自己紹介を始める。

桜色の縦巻きロールみたいな髪形をした、とりわけ整った顔立ちの女性がエミーナと名乗り、その次にソバカスが鼻の辺りに少量散らばっている黄緑色の長髪を斜めに一つに縛っている女性がグルーラと名乗った。

次々に順番がまわり、いつの間にか私の番となっていた。

私はお得意の笑みを浮かべて、自己紹介する。

「リフェエラ国第三王女ルキア・リフェエラです。一ヶ月間、よろしく願いますね」

私が言い終わり、優雅にイスに座りなおすと、フィオルがこちらを直視していた。

彼はとてつもない爽やかな笑みを浮かべて、こちらを見据える。

……なにか、彼からは私と同じ臭いを感じる。
ちよっとヤバイ。

ほら、他のお嬢様が自己紹介してるぞ！そっちを見ろ！こちらを見

るんじゃない！

というような意味をこめて、私は彼に笑顔を向ける。

すると彼は口元に奇妙な笑みを浮かべて、私から目を逸らした。

いったい、何なんだ。

その後無事に集会……というより、ただの自己紹介は終わり、各自部屋へ帰った。

これからは特に集まったりするということはないらしい。

裏を返せば個人的に王子をおとせと、そういう意味だろう。

つまりは部屋から出なければ王子と会うことはない、ということになる。

私は一ヶ月間引きこもるぞ！



——無理でした。

レイナは何処かへ行き、組織からの情報も先程帰ったばかりなのでくるはずもなく、暇つぶしの読書の本も持ってこなかった私は暇に耐えきれず、庭をまわることにした。

私としてはこの国の地形を直に歩いて、記憶にインプットさせるのも利益につながる。

あまり遠出はできないので、今日ぐらいは庭で我慢してやろう。

私は庭に出た。

花壇に綺麗に花が並べられていて、中央には小さな噴水。とても、なごめる空間。

私はピンク色の、小さな花が咲いている花壇の前にしゃがみこみ、花を眺める。

最近はやつくりと花を眺めることもなかったな。

そんなことを思っていると、不意に後ろから声をかけられた。

「その花、好きなのですか？」

とても爽やかな、それでいて私からは奇妙に思えるほどの笑みを浮かべたフィオルに。

嫌味野朗

その花、好きなのですか？

私にはこやかな笑みを作りに繕ったフィオルに声をかけられた。

まあ、そこまではよしとしよう。

だが、彼はそのまま私の隣に来て、私の隣に腰をかけたのだ。

「ええ、初めて見た花ですが、好ましいと思います」

私は少し笑んで、そのまま彼のいない方へと少しだけ、気づかれないうようにずれる。

しかし彼はそのことにも気づいたらしく、立ち上がって綺麗な白い花を一本、素手で折りやがった！

「なにするんですか？」

あくまでも冷静に、清楚に、笑みを浮かべて私は問いかける。

口元が引きつっているかもしれない。

彼は私を見ると、先ほどまでの爽やかな笑みとは打って変わって、とても嫌味な、卑しい笑みを浮かべながら

「君みたいな女性を見ると、汚したくなる」

なんていいながら、手に持った白い花をグシヤリと握りつぶした。
そしてパッと手を開き、無様に散った花びらが地面に落ちていく。

……………というか、汚したくなるって、

「どういう意味ですか？」

冷静。

清楚。

上品。

騙し。

上辺。

笑顔。

そんな私の今まで心がけてきた言葉を頭にグルグルと浮かべながら、
私は彼に問う。

すると彼はフッと鼻で笑って、そのまま帰ってしまった。

なんなんだ、あの男は！？

鼻で笑われたのはここ八年の中で始めてだ！

……………あの男、絶対にみんなの前で恥かせてやる……………！

私は心の中で誓いながら、綺麗な花の花壇を後にした。



「ルキア様」

私を、呼ぶ声。

慣れ親しんだ声が、私の頭に降り注ぎ、私の体をゆする。

「ルキア様」

「……………」

「そろそろ起きませんか、私がレイン殿をお呼びしますよ？」

「おはようっ！」

「はい、おはようございます」

私はバツと起き上がり、楽しそうな笑みをこちらに向けるレイナを見上げた。

ここは、ベッドの上。

あれ、いつの間にねたんだっけ？

「ルキア様、夕食お召し上がりになっていないじゃないですか。帰って早々、つかれて寝てしまったのですか？」

それはこっちが聞きたい。

まあ、色々とつかれて寝てしまったのだろう。レイナの言うとおりだ。

窓から外を見ると、もう暗い。窓から見えていた中庭の、花と噴水の風景も、もう暗くて見ることは難しい。

庭から帰ってきて、ずっと寝ていたのだろう。かなり時間が経過したようだ。

私は昼間のままだった、しわくちゃになった服を見て

「あちゃー、しまったな。レイナ、着替えある」

「どうぞ」

「ありがとう」

そういつて受け取った服。

胸元に小さな白いレースのリボンがついているだけの、何の変哲もない白いワンピースのような服。とても清楚そうで、着方によっては大人っぽく見える服、なのだが。

「なぜこれから寝るといふのにこの服なの？」

寝るのにワンピースはないだろう。

どうせしわくちゃになるんだから、もっとどうでも良いような服でないと困る。

そんなことを考えていると……

「何を言っているのですか？これからレイン殿の母上に会われるのですよ？清楚な服で完璧じゃないですか」

「は？」

私は今日一番の間抜けな声をもらした。

「なぜ、私がレインの母上と会わなくてはいけないのか説明を要求するわ」

「言いませんでしたっけ？母上殿が隣国のよしみで、少しお話をしたいとおっしゃられて……」

「初耳よ！」

これから寝るというのに、なぜレインの母上と会わなくてはいけないのだろうか。

って、レインの母と会う……って、下手したらレインと嫌味笑顔なフイオルとも会う可能性があるじゃないか。

可能性がゼロとは言い切れない……。

「はぁあー」

私は重く長いため息をついて、服を着替え、母上と面談をする予定の母屋に向かった。

嫌味野朗（後書き）

日間一位、週刊五位にランクインしました！
ありがとうございます！

これからも頑張りたいと思いますので、欠点や誤字など、気軽に教えていただけると幸いです。

面会

母屋。

そこは離れの邸と違い、とても華やかなイメージがわいてくるものだった。

邸は真っ白。

純白。

たまに見ているとイライラするような純白の壁紙に天井。唯一床がレモンのような、それよりも少し淡いような色なのだが。

母屋は黄色の混じった、淡い黄土色の壁紙。天井には大きなシャ
ンデリアが等間隔とうかんかくに設置されており、なんというか……優しい感じ
の色だった。

床は純白！

母屋の廊下には、邸と同じように絵や花が飾ってある。庭にある花
を飾ったであろう花。絵にも景色……主に花を描かれているものが多
かった。おそらくレインの母君、ルシファアの趣味だろう。

私はそんなことを思いながらも廊下を歩き、呼ばれていた客間へと
足を運んだ。



私は茶色い古風な扉の前に立ち、コンコンとノックをする。

「失礼します。ルキア・リフェエラです」
「どうぞ」

名を名乗り、私は返事を待ってから扉を開ける。

中へ入ると、半径三メートルくらいの円状のテーブルがあり、白いやわらかそうな布に覆われていた。それを囲むようにおかれたイスに、ルシファアはもちろん、レイン、フィオル、クロードが座っている。

……なぜ、レインたちまでいるのだ。

ルシファアは私を呼んだ張本人だからいるのは当たり前として、なぜ、コイツ等らがいるのだ。

「座ってください」

「……はい」

私はルシファアの言葉に頷き、目の前のイスに座った。あくまで優雅に。

一瞬フィオルのほうをちらりと見ると、彼は白いスーツのようなものに身を包み、爽やかすぎる笑みでニコニコとこちらを凝視していた。

……やりづらいことこの上ない。

レインもこちらを見ていたが、表情に変化はない。
それは、まあ、いいとして。

「……………」

気になるのは彼等の弟、一番下にあたるクロードがずっとそわそわしていることだ。

窓から暗くなった庭を眺めたり、テーブルの下の足元を見つめたり……。

正直、イライラする。

何をすればあそこまで挙動不審になれるんだ。貴様の兄を見習え！

……訂正。

あそこまで凝視しなくて良いから、せめてフラフラと目線を動かすのはやめろ！

そう叫びたいが、まずは母君の話が先。

私はにっこりと笑みを浮かべて優しそうな雰囲気を放つ彼女に話しかける。

「今日はお招きいただきありがたく存じます。ところで、ご用件は……?」

すると彼女はパーっと顔を輝かせた。

今の言葉のどこに顔を輝かせる要素があるのだろうか。

彼女は美しい顔立ちのまま、言う。

「あなたには是非、我が子の妻となっていただきたいの！」

……………。

……………。

「えっと……。すみません、よく聞こえませんでした。もう一度伺ってもよろしいですか？」

「ええ、何度でも！貴女には、我が子の妻…つまりは正式な妃となつてほしいのよ！！」

父上。

今の言葉をあなたの情報網が手に入れていたとしたら、あなたはどれだけ喜ぶことでしょうか。

いえ、あなたはおちゃらけた言動をよくしていますが、私が八年もかけて築き上げた組織を消すくらい楽勝にできるお方。早速情報を手に入れて……。

……それはもう、喜んでいるでしょうね。

あなたがドジョウすくいのような踊りを不審に踊っている光景が目に見えます。

まず、一つ言わせてください。

今回の彼女の言動、

てめえがかかわってんじゃねえだろうなあ！？

私は頭の中でクソ親父に語りかけながらも、ルシファーのほうを見据えた。

頭、大丈夫ですか。

という思いをこめて。

面会（後書き）

日数あけてしまつて申し訳ありません。
お気に入り、評価、感想、ありがとうございました！！！！

計算？天然？

「正式な妻、ですか」

驚いたことに、私よりも先に口を開いた人物がいた。

……………レインだ。

彼は冷たい目で自分の母を見て、問う。それにルシファアは笑んだ。

「ええ。何か問題でも？」

「いえ……………」

彼は視線を斜め下に逸らし、身を引いた。

うおい！せめて「嫌です」の一言でも言ってくれ！私と結婚なんて嫌だろう！？復讐をたくらんでいる女が妻だぞ！？毎日嫌がらせするぞ！？

なんてことを頭で必死にいいながら、笑顔を崩さずに私はルシファアを見据える。

彼女は輝くような笑みで私に言った。

「ルキアさんも、いいですね？」

この女……っ。

天然なんだか計算なんだかわからない。

というところも計算に入っているのだろうか。

いや、むしろ天然100パーセント？

わからない……。

そのとき、初めて第三王子、クロードが口を開いた。

「お言葉ですが母上。彼女の意思も聞いて見てはどうでしょうか」

「あら。彼女は側室、または正室となるためにここに来ているのよ？ 断るわけがないじゃないの」

即答。

しかも私の感情には相反するとしても、最もな意見だ。

これでは逆らうことができない。

クロードは「まあ、そうですが」といって、不服そうに食い下がった。

すると今度はフィオルが言う。笑顔で言う。

「母上」

「なに？」

「彼女……ルキアを、私の妻に」

なんて突拍子もないことを。

「なっ!？」

それに私は、声を上げてしまった。なんとも間抜けな声をもらし、ルシファアのほうを見る。

それから、フィオルのほうを見る。

彼はいまだに爽やか笑顔を振りまいていた。
くそう、なんてことを言い出すんだ。

さっき私に汚したくなるとかどうとかって、戦線布告してきただろうが!

なんて心の叫びも聞いてもらえず、ルシファアは言い放った。

「わかりました。ルキアさんも、よろしいですね？」

「……………」

「では、解散にしましょう。今日からルキアさんの部屋はフィオルの部屋へと移動をしておきます。フィオル、案内なさい」

「はい」

私返事してません。

勝手に話を進めないで下さい。

レインはなぜかフィオルをいつもの冷たい視線で見据え、クロードはいかにも不服そうな、怪訝そうな顔を私に向けた。

私をそんな目で見るな!恨むなら貴様の母を恨め!そして私を国に帰せ!



その場にいたフィオル以外が部屋から退散すると、私は笑顔でフィオルを見上げた。

「申し訳ないのですが、まだ私には——」

「へえ、まだそんな笑顔つくってられるんだ」

「はい？」

彼は私の言葉をさえぎって、もう爽やかさのカケラもない卑しい笑みをこちらに向けた。

そして言い放った。

「母上の決めたことは俺達にとっては絶対だ。どんな言い逃れを考

えてたかは知らないが、不可能だぞ？」

「……………なんの、話でしょうか」

「しらばっくれるか。まあ、それもいい。お前の本性は俺が暴いてやるよ——」

冷汗が、頬をつたうのがわかった。

コイツは、もう気づいている。

私が猫をかぶっていること。妻になる気なんてさらさらないこと。

この国を好いてはいないこと。

そして、考えようによっては敵視せねばいけない相手であることを。

彼は何かをたくらんでいるような笑みで続けた。

「——ベッドの上で」

と。

……………って、は!?

計算？天然？（後書き）

へ、変態！

これを書きながらそう思いましたWW

更新遅くなり申し訳ありませんっ。

部屋替え希望

何を言い出すのだろうか、この笑顔野郎は。

「……………」

私は無言でフィオルを見つめる。
すると彼はまた、爽やかな笑みに一瞬で戻り、私に言った。

「では、私の部屋へ案内します。これから夫婦となる可能性が高いので、よろしくお願いします」

嫌です。

貴様と同じ部屋でなんて死んでも嫌。

……だが、この城のどこに誰がいるかわかったもんじゃない。

「申し訳ありませんが――」

「無駄だよ。母上の決定は絶対だ。君に逆らうことはできない」
「……………」

また遮られた。

……………もう限界だ。

こんな奴に笑顔振りまくのも疲れた。

私は話すだけ無駄と判断し、彼を背に扉に手をかける。

ガツツ

「……………!?!」

私は扉に手をかけたと同時に、首もとに鈍い痛みを感じ、そのまま気を失った――。



「ん……………」

私の目の前には、見慣れぬ天井。

我がリフェエラ城の天井でもなければ、滞在先の邸の純白の天井でもない。

少し黄色のかかった、クリーム色とでもいうのだろうか？

そんな、あたたかい色だった。

私は横になっているらしい。

目の前に天井があり、私はフカフカなベッドのような――って、ベッド！？

私は勢いよくそのベッドと思われる物体から飛び起きる。

辺りを見回すとそこは正方形の個室で、大きな窓に淡い茶色一色のカーテン。

それに資料のような白い紙が一メートルほどのコンパクトな机に散らかつていて。その前にある木の様なイス。他には何の変哲もない大人びた、いや、殺風景な部屋。

そしてその机に背を向けるようにイスに座って私を見据える、金色の綺麗な瞳。

「起きた？」

「…………ええ。できれば起きたくありませんでしたが」

私は笑顔で嫌味を言う。

しかし彼はそれにニヤリと笑いながら言った。

「君って実はものすごい嫌味な女性だよね」

お前に言われたくない。

彼はそのまま、先程強く私の首を打った事など気にもとめていない

ような口ぶりでそのベッドは今日から君のものだよ、なんていいだした。

「首がものすごく痛いのですが」

「そう？」

「……」

ぶん殴りたい。

ここまで人を殴りたいと思ったことはあっただろうか？

否。

断じて否だ！

私は今にもフィオルの顔面めがけて動き出しそうな右拳をなんとか押さえつけながら、彼に問う。

「私はもとの手配されていた離れの部屋で良いです。御付のこともありますし」

そうだ。

私がこの部屋に滞在することになってしまったら、レイナはどうするのだろうか。

彼女だけ先に国に帰るなんて私が許さない。
帰るのなら私も連れて行ってほしい。

「ああ、それなら大丈夫だ。君の御付は先に国へ帰ってもら——」

「お断りします」

「？」

「彼女は御付という名前のもと私と行動をともにしていますが、私の本当の家族のようなものです。彼女と離れるのであれば私は彼女と一緒に国へ帰ります」

どうだ。

この私の『お姉ちゃん大好き!』作戦は。

これなら貴様も納得するだろう。それとも貴様は親愛なる家族^{レイナ}と引き剥がしてまで――

「いいね。君が姉のように慕っている存在と引き離されて泣き叫ぶ姿も見てみたい」

鬼か!?

「…………冗談だよ。彼女はまだこの城にいてもらう。まあ、一ヵ月後には君と彼女ははなれると思うけどね。相手が誰であろうとうちの母上は君と俺たちを結婚させたいらしい」

つまりは私はこのフィオル含む三兄弟の誰かを結婚しなければなら
ない?

ふざけるのもたいがいにしてほしい。

なぜ私に『結婚しない』という選択肢が残っていないのだろうか。

まあ仮に結婚をするでしょう。

レイン…は、ありえない。復讐相手と結婚するくらいなら他の奴が
いい。

フィオル…も、嫌だ。こんな奴といたら私が死ぬ。精神的に。

クロード…あまり接点がないからわからないが、まともな奴である
ことを願おうか。

とにかく、早く部屋を替えてもらわなければ。

不審人物？

とにかく、早く部屋を替えてもらわなければ。

そう意思を固めて早8時間。
もう、朝でした——。

「…………自分の神経の図太さが嫌になる」

私は独り眩き、フカフカのベッドから身を起こして、茶色のカーテンの隙間から見える朝日のまぶしさに目を細めた。
そして私の着ている服装に、目を見開いた。

昨日私が来ていた服は純白の緩やかなワンピース。
しかし今来ているのは……、

淡いピンク色の、可愛らしいレースのついた露出多めのネグリジェ。

いつ、着替えたんだっけ？

いや、そもそも私なんどこで寝てるのだろうか。

——ってか、こんなネグリジェもってきていた！？

私はベッドから移動しようと、立つために手をつくとき、何かに当た

った。

そこには白い紙があつて、何かが書かれているようだった。

『ルキア様へ

まず、おめでとうございます。

ルキア様の長年想い続けた相手でないことは残念でしたが。

王には私から伝えておきます。

きつと王は泣き叫ぶことでしょう。

追伸・服は露出の多いものを用意させて頂きました。頑張ってくださいね！

レイナ』

「……………なぜ私の周りにはまともな奴がいなかったんだろうか」

というか、何をがんばれというのだ！？

確かに王は泣き叫ぶよ！嬉しさのあまり！

……しかし、『長年想い続けた相手』と書いたところはさすがレイナだ。

復讐を目的としていたとはいえ、想い続けていたのは確か。

レインという名前を出していないということは、彼女は他の人物にも見られることを予想していたのだろう。

「君が長年想い続けていた相手、気になるな」

彼のように。

声ができるほうを見ると、そこには金髪金眼の優しそうな雰囲気をもった鬼……のような人物が立っていた。そう、フィオルだ。

「おはようございます。お仕事をなさらなくてよろしいのですか？」

さっさと出て行け。着替えたいんだ。

私はそのような意味をこめて彼に笑顔を振りまく。もう無駄のようだが。

彼は気づいている。

しかし深く追求しないところも彼らしいといえれば彼らしい。

フィオルは

「そうだね。そろそろいかなきゃなー、面倒くさいけど」

なんて王子にあるまじき言葉を残して去っていった。

私は部屋に誰もいないことを確認して、着替え始め……

「服どこだよ!？」



私はやつのことで見つけ出した、レイナが置いて行ったであろう服を身にまとい、部屋を出た。

とりあえず今までかりていた部屋に身をおくために。



庭。

そこはキレイな草花がたくさん咲く、心休まる空間。

私は邸に行くがてら、庭を少し時間をかけて堪能しようとした。

ちょうど青いバラや赤いバラ、見たことのないような色をしたバラなど、バラ一種の花壇を通り過ぎようとしたとき、

バダンッ

大きな物音。

人が倒れたような、大きな音がした。

私は不思議に思っ
て恐る恐る物音のした方向へ足を運ぶと、案の定、人が倒れていた――。

病人

「……………」

そこにうつ伏せになった状態で倒れているのは黒い物体——ではなく、紺色の艶やかな髪を持った、まだ幼さの残るあどけない顔立ちの男。第三王子、クロードだ。

さて、ここで選択肢は三つに分かれる。

一、声をかけて助ける

二、「あ、そういうば！」とか適当に理由作って逃げる

三、無言で逃走

……………」

人が見てると悪いし、一、かな？

「あの一、大丈夫ですか？」

私は庭で倒れている王子を目の前に、適当に声をかける。

が、返事が全くない。
コイツ本当に王子か？ 昼寝…なわけないよね。だってうつ伏せだもの。

しかしまあ……よく見ると小さいときのレインの顔に似ている。
彼がもう少し幼かった頃はこんな顔立ちだったのだろうか？

「って、私は何を考えているんだ!？」

そういうながら、ブンブンと頭を振る。

「う……」

そこで、クロードが苦しそうなうめき声をあげた。

よくよく見ると、顔色は少し青白く、具合が悪そうだ。

……面倒なことに巻き込みやがって。

そんなことを考えながらも私は立ち上がり、少しはなれたところに庭の手入れをしている庭師のところへ走った。

「すみません、クロード王子が具合が悪そうで倒れています。部屋に運びたいので手伝ってくださいませんか？」

「クロード王子が!?! わかりました。急ぎましょう!」

庭師は話しのわかる人で、すぐ一緒に私がかかりている離れ邸のベツドまで運んでくれた。



夕方。

クロードをこの滞在部屋へつれてきてすでに10時間近くたった。

この部屋へつれてきたときよりも顔色はよくなったのだが、一向に目覚めない。

このまま永久に眠られると私が殺したみたいで怖いんだが。

彼の頭の横にはいつ起きても良いように水を置いておいた。

私は彼の顔をじーっと見つめていると、一枚の赤いバラの花びらが窓から入ってきて、彼の頬の上に落ちた。

「……………縁起悪……………」

そう呟きながら花びらを取ろうと手を伸ばすと、パチッと不意に目を覚ました。

私の手が、止まる。

彼はこちらを数秒見据えると、私の手を自分の手で払い、

「お前何をする!？」

威勢よく飛び上がった。

病人だろう、おとなしく寝ていなさい。ともいえずに

「あのですね……」

理由を説明しようとする彼は突然あわあわとしやべりだした。

「おおお、お前はあれか？ぞ、俗に言う人攫ひさら…グホオオツツ」

「ぎゃあああああ!？」

突然、何をしゃべりだしたかと思うと、彼は吐血しだした。

不意をつかれた私は思わず悲鳴をあげる。

「ちょっと!病人なんだからおとなしく寝てろ!せっかく倒れていたお前を私の部屋の連れてきてやったんだ。ありがたいの一言も言えないのか!？」

そこまで言って、ハッと口元を押さえる。
しまった。ボロを出した……。

フィオルに突き止められても出さなかったと言うのに。

吐血で私のボロを出させるとは。なんという奴だ。彼が一番大物だ
ったりして。

「お、おまつ……もっと清楚な女じゃなかったのかッ……ゲホッッ」
「そんなのはいいから、早く寝ろ！あと私の滞在部屋を血で汚すな
！ほら、水……」

私はこのさいどうでもいいと観念して、クロードに水を与える。
しかし意外と、ガキみたいな発想の持ち主だ。

集会で見たときのそっけなさ具合の悪さからきていたのか。

医療室にて。

第三王子、クロード・クシェラードが吐血してから約五分。

集会のときに見た彼の雰囲気はどこか素っ気なく、つまらなそうだった。

しかしそんなことは私の勘違いで、彼はただたんに気分が悪いだけだったのだ。

彼は私のベッドに腰をかけ、猫背になって息をならしている。

世の中は不条理だ。

いくら顔色が悪くても美形は美形。

紺色のやや真直ぐな髪に、くるんとしたまつ毛。鼻はスラっとのび、彼の兄達に比べると幼い気もするが、かなり整っている顔立ち。

本当に不条理だと、私は今も辛そうにしている彼を見て思う。

「ゴホッ……………」

苦しそうに咳き込むクロード。
紺色の髪が小さく揺れる。

彼は庭で倒れているほど貧弱だったのか。とても今まで見てきた時はそんなふうには見えなかった。
母は健在だし。

………そういえば、この国の王を私はまだ知らない。
噂にはとても知力に長けた王だと聞くが。

正室、側室候補を集めたときもルシファーが仕切っていたし、集会にも王は出てこなかった。

不本意ながら母屋に足を運んだときも王らしき人物は見えていない。

どこかへ外出しているのだろうか。

そんなことを考えていると、クロードの咳き込む回数が増えてきた。

「医師呼んで来る」

さすがにやばいのではないだろうか、と感じた私はこの城にいます。
あろう医師を呼ぶために立ち上がる。

しかし彼は本当に病人か？と聞きたくなるような力の強さで私の腕を強くつかんだ。

「え……」

「呼ばなくていい」

「でも」

「いいんだ。こんなのいつものことだし、すぐに治る」

じゃあ早くその吐血をとめなさいよ、とはいえない雰囲気。とりあえず私は彼の手を優しくはらい、

「じゃあ、医師呼んで来る」

「うおい！ いらないうってゲホオツツ」

吐血する彼を背に、医師を呼ぶため走り出した。

別に放っておいてもいいのだが、いつまでも私の部屋に血をばらまかれると部屋を掃除するメイドが気の毒だ。それに血生臭いのは勘弁してほしい。

私は走って母屋に行くと、医療室の扉を、ノックせずに開けた。まず、ここが間違いだったのだ。

部屋を開けるにはまずノックをしないと、よく言われていた。私は覚えられることはしっかりと覚えるのだが、そのぶん忘れやすさも半端ではない。

ノックをすることを、城でもよく忘れていたのだ。兄上の部屋に入ったりするときもノックをせずによく注意されていた。

やわらかく怒る兄上の顔が目には浮かぶが、そんなことはこの際関係ない。

兄上。

あなたの言うことをしっかりと覚えておけば良かったとこの日ほど後悔したことはないでしょう。

——私は医療室にいる人物を見て、ひどく後悔した。

己の気持ち

この日ほど、ノックをしなかったことに後悔したことはないだろう。

中では二人の人物がいた。

一人は白衣を着た、三十路いくかいかないかくらいの、少しヒゲをはやした男性。

この医療室の医師だろう。

すこしチャラチャラしている顔立ちだが、人は見かけによらないから大丈夫だろう。

——問題はまだ一人のほうだ。

冷たい印象を持たせるスカイブルーの髪。

後姿なので顔はよくわからないが、細く、癖のない短髪。

そしてなぜか上半身裸！

ここが一番問題なのだ！

簡単に頭を整理すると、こんな状況。

私はノックを忘れました。

そしたらレインっぽい人が上半身裸で診察を受けています。

はい。終了。

「えっと……失礼しました」

とりあえず扉を閉めようと思い、言葉を発するとレインっぽい人がこちらを振り向いた。

スカイブルーの瞳。

目元にかかるくらいにのびた前髪。

すらっとした鼻。

細身なのに筋肉質な身体。

彼は間違いなくレインだ。

彼は私を見るなり目を大きく見開き、

「どうした…？」

低い声で私に問う。

聞かれたら答えなければいけない。

私の部屋で今もお吐血しているクロードに悪いし。

「庭でクロード様が倒れていらっしやるのを発見して、体調がひどく悪そうなので、医師を呼びに参りました」

そういうと、なぜかレインの顔が一瞬、ほんの一瞬だけ引きつった。そしてすぐに医師に診察を頼む、と言った。

彼は私を見据え、

「クロードはどこに？」

と、問う。

それに私は答えた。

「今は私の滞在部屋に」

するとまた、彼の顔が引きつった。

なんなんだ！

私が何をした！

そう言うのを我慢して、自分の滞在部屋へと足を運んだ。

▼レイン視点▼

今日は、なぜか喉の調子がよくなくて信頼のできる医師、ジェル
メに見てもらっていた。

診断をするので服を脱ぐよう言われて、服を脱ぎ、診察を受けてい
ると、勢いよく扉が開いた。

特に気にもとめていなかったのだが、医師が目を見開き、

「えっと……失礼しました」

という声を聞いて、すぐにこの声はルキアのものだと気づいた。

俺は反射的にすぐに後ろを振り向き、どうした？と問う。

すると彼女は『庭にクロードが』と語り始めた。

クロード……。

以前母上が父上のいないことを良いことに勝手に決めた、兄上と同

じ部屋なったこともかなり苛立ったが、彼女の口から他の男の名前が出るだけで同じようにイライラする。

それをおさえながら彼女に居場所を聞くと、『私の滞在部屋』と答えた。

奴は彼女の部屋で寝ているというのか？

なんと羨ま……図々しい奴なんだ。

庭で倒れるほど体調が悪かったのなら、部屋で寝ていればいいというのに。

奴はいつもそうだ。

いつも体調を偽って外に出て、そして周りに迷惑をかける。

——だから俺は、クロードが嫌いだ。

しかし見に行かないのも、ここまできてくれたルキアに悪い。

俺はジェルメを連れて、クロードが寝ている彼女の部屋へ向かった。

ついたのはなぜか、兄上の部屋ではなく、彼女がこの国に来たと

きに他の者同様に用意されていた小部屋だった。

では、兄の部屋では彼女は寝ていないのだろうか？

そう思うと少し嬉々とした感情があふれてくる。

俺はこんな些細なことで感情を揺さぶられるほど、彼女に惚れていたことを今改めて確認した。

己の気持ち（後書き）

長らく更新できずに申し訳ありませんでした。
というか、レイン君病みはじめて……

そのうち本気で病むかもしれません（苦笑）

お気に入り登録、感想、評価ありがとうございました！

無表情

医師を呼び、クロードのところまで急ぎ足で向かった医師と私、そしてレイン。

まずそこで疑問点がある。

医師と私はいい。私は意志を呼んだ側の人間だし、医師が来なかったらどうするのだという話しになるからだ。

しかし、レインはついてこなくて良いのではないのだろうか？

兄だから心配、となれば納得もするが、私がクロードの名前を出しただけで顔をしかめるほど、仲はよくないのだろう。嫌いなら放っておけばいいものの。

それとも上辺は仲がいいとか？

……：そういうふうには見えない。同じ空間にいても話をしたこと

を私は今までで見たことがないのだ。

彼ら三兄弟が、兄弟らしい発言をしたことを見たことがない。

それに、ルシファア。彼らの母ともあまり親しくなさそうだった。

確かフィオルが言っていた。

『母上の命令は絶対だ。君に逆らうことはできない』

では、彼らにとっても命令は絶対である確立が高い。私が結婚を無理やり約束させられたときも、彼らはあまり反抗的な行動をとらなかった。

レインなんて思いっきり仏頂面していたが。

私達はすぐに私の滞在部屋につき、クロードを見据える。顔色がさらに青白くなっており、容体は先ほどよりも悪そうに見える。

医師が早速診察し始めた。

「べ、別に呼ばなくてもいいと……ゴホ……」

今にも死にそうな表情で私に文句を言ってくる。

いいからさっさと診察してもらって私の部屋から出て行け。

と言いたいのだが、猫をかぶっている身としてはさすがにいいない。

医師は

「あちゃー。また無理したんだな、坊ちゃん」

なんてお気楽そうに言っている。

一応この国の王子だというのに、そんなチャライ言葉遣いでいいの
だろうかと思ったのだが、とくに誰も反論しなかったので昔から親
しい間柄だったか何かのだろうと思うことにした。

私とレイナと似たような関係なのかもしれない。

私はクロードを見据えていたが、やがて言葉を発しないレインが
気になってレインを見上げる。

見ると彼は無表情で、クロードを見つめていた。

弟を、特に関係のない赤の他人のような瞳で。

彼の体調が悪いことを何も感じていないような瞳で。

彼を、なんとも思っていないような瞳で。

同じだ。

私が彼に告白をしたときもそうだった。

最初こそ驚いて瞳孔を多少開いたが、すぐに無表情で冷たく言い放った。

『僕は嫌いだ』

あの言葉は今でも覚えている。

そしてその後、私の頭にふってきた言葉。
部屋でわんさか泣きじゃくっていた私に、容赦なくふってきた、頭に響いた言葉。

………なんて言っていたかは覚えていない。

でも、確かにその時は聞こえた。

私の心をえぐるような、冷たい言葉。

思えば復讐を誓ったのも彼の『僕は嫌いだ』という言葉を引き金に、その頭に響いた言葉が原因だった。
なんと、言っていたのだろうか。

なんと――。

私は必死に頭の中を探す。

あの声を。

あの言葉を。

しかし探すにつれて、頭に頭痛がはしってくる。
グルグル、グルグルと頭がまわる。

「く……………っ」

私は短く悲鳴をあげて、その場で意識を失った。

嫉妬（前書き）

レイン視点です

嫉妬

「く……っ」

俺の隣で、小さく悲鳴をあげて倒れたルキア。
顔は歪んでいて、クロードよりも重症じゃないかと思えるくらいに
つらそうだった。

「ルキア!?!」

俺は叫ぶ。

そしてすぐに彼女を抱き起こそうとした。

「おい、触るんじゃない!」

同時に医師のジェルメが怒鳴った。

「だがっ」

「症状がわからねえんだ！レイン坊が心配するのはわかるが……」

ジェルメの判断は正しい。

医師の才能に恵まれていて、そのうえ努力してこの国一番の医師になった人間だ。

彼が言うのだから間違いはないだろう。

それに昔から俺たち兄妹の症状を見てきてよく話すきかいが多くあったから、彼がこの状況で嘘を言うことはありえない。

「…………つくそ。ジェルメ、みてくれ」

「ああ。クロード坊、場所を譲れ」

そう、先ほどまで吐血していたクロードに命令する。

それに、素直にクロードは場所を空けた。

驚いたのか、クロードの咳は止まり、彼女をじーっと見つめていた。

ジェルメが容体を見るために彼女の体に触る。

見ないでほしい。

触らないでほしい。

ずっと彼女とあえるのを待っていたんだ。

あの時の俺はまだ国の言いなりになるしかないただの人形だった。
誰も愛しいと思わず、人形の決められた生活を当たり前だと思って
生活してきた。

なのに…

なのに…!!

ガシッ

俺は右手で額を押さえた。
彼女が苦しんでいるのに、俺だけこんなわがままな独占欲丸出しで
どうするのだろうか。

「はあー。ジェルメ。ちょっと頭冷やしてくる」

「良い判断ですよ、王子」

彼は含み笑いをしながら俺に手を振る。

ジェルメはきつと気づいているだろう。俺が彼女に惹かれているこ
とを。

今、俺が考えていたことを。

「ジェルメに敬語を使われると母上に怒られたときよりも怖い。寒気がするぞ」

「へいへい。さっさといってらっしゃい。坊ちゃん」

俺はジェルメにそういい捨てて、ルキアの部屋を出た。



部屋を出ると、なぜか扉の前に他国のご令嬢たちが耳をそろえて聞

き耳立てていた。

「なにをしている…?」

「ひゃあ!…:れ、レイン様ツ。えーっと…:これは、その…:さ、散歩ですわ!」

「そうです! 散歩ですわ!」

「ええ!」

口々に言い訳がましいことを言う。

桜色の縦巻きロールのような髪型をしている女と、抹茶色の髪の顔に大量のソバカスのついている女。

あとはその取り巻きだろう。

しかしここで問い詰めれば面倒くさいことになりかねない。

「気をつけて散歩を続けてください」

俺は一応礼儀をわきまえながら、彼女達から離れた。

嫉妬（後書き）

遅くなりました…。

レイン君さとう病んできてますね。

お気に入り登録ありがとうございます！毎回感想や評価、お気に入り登録が励みになります！

症状（前書き）

ジェルメ視点です

症状

ふう、と一息ついてから俺は方にぎりぎりつくぐらいの中途半端な長さの黒髪を書き上げルキアの方を向いた。

しつとりとした長い黒髪に、きめ細やかな肌。とくに何もしてなさそうだが、彼女の外見には華があった。

誰にも興味をしめさなかったレイン坊がほれたのもなぜかわかる。

レイン坊が熱心に政治に目を通すようになったのは確か10歳くらいのおときだったろうか？

俺に医術まで聞きに来たときは驚いた。

今ではそこそこの医術の知識はあるだろう。

しかし、倒れた人間を不用意に動かしてはいけないと知っているはずの奴がそんな初歩的なことまでを忘れて彼女を抱き起こそうとした。

それだけで彼女が奴にとってどんな存在なのかわかる。一応奴が生まれた瞬間から見ているしな。

まあレインがこれからどうするかなんぞ俺には関係ねえ。
問題はこの嬢ちゃんだ。

最初はクロードを心配して走ってたくらい元気だった。
顔色にも問題なかったし。

考えられるとすれば持病が急に発生したか、精神的なものだろう。
……別に精神面では問題なかったと思うがな。俺たちの前だったし、とくに話しかけてもいない。

記憶上のことか…？

そう考えていると

「彼女はどうなんだ？」

不意にクロードが容態を聞いてきた。

「ん……おそらく貧血だろうな」

「おそらく…？」

「ああ」

「あんたが『おそらく』なんて…」

「はっきりしたことはわからねえ。お前少し前から一緒にいたんだろう。なにか変わったことはなかったか？」

「…………いや、なかったと思う」

やはり精神的なところしか考えられねえな。
俺は嬢ちゃんの顔をまじまじと見つめた。

——ガチャン

「今戻った」

扉が開いてレインが戻ってきた。頭もそれなりに冷えたようで、冷静さを取り戻している。

と、同時に

「ん…………」

小さな声を上げて嬢ちゃんが目を覚ました。

「ルキアッ」

嬉しさのあまりかいつも冷静なレインが顔をほころばせて嬢ちゃんに駆け寄る。

そして

「体調に変わったところはないか？」

そういいながら熱を測るために自分の手を嬢ちゃんの額に手を近づける。

すると、パシンと小さな音を立ててレインの手のはじかれた。

「気安く触れるな。ってかあんた誰よ」

先ほどの「お嬢さん」という話し方などカケラもない、冷たい口調でレインに言い放つ。まるで本当に見ず知らずの、どうでもいい人間見るような表情で。

その言葉をきいた瞬間、レインの表情は曇った。

記憶喪失

私は誰？

ここはどこ。

そして、この目の前にいる青髪は誰！

「ルキア……」

青髪の男がなぜか心配そうに私を見つめる。

ルキア……

何かの呪文のまじないとか？

私がキョロキョロしていると、白衣を着た三十代くらいの、少しおっさん臭い男が私に話しかけてきた。

「嬢ちゃん。自分の名前、わかるか？」

「……知らない」

「ここが何処か」

「わからない」

「ここにナイフとフォークがあります。ナイフはどっちの手で持つ？」

「右」

「うーん…」

白衣は少し考えてから、真剣な顔で私にいった。

「まず、嬢ちゃんは健忘症……つまり記憶喪失だ。これから言うことは全て嬢ちゃんの身のまわりのこと。覚えとけよ」
「……………」

私は無言で頷く。

だって、それ以外にどうしようもないから。

自分が誰かすらわからないこの状況で、手に入れられる情報は多い方が良い。

「あんたは、この国クシェラード国の隣国のリフエエラ国第三王女、ルキア・リフエエラだ。そして嬢ちゃんはこの国の妃候補を決めるために、一ヶ月、一時的に集まってもらった中の一人」

「なぜ私が妃なんかに来たかが疑問なのだけれど」

「そんなの嬢ちゃんが自分できたか、親に命令されたかだろ」

「……………知らないけどその親って人を思いっきりぶん殴りたい」

私がそういうと、白衣の男はちよつと笑ってから、続けるぞ、と言った。

「嬢ちゃんはこの貧弱なクロード第三王子が倒れていたのを発見して、俺に知らせにきたんだ。それで俺がコイツを見ているときにあんたが倒れて記憶喪失ってわけ」

「……………」

「それで俺とあんたはこの城で出会ったときに恋に落ちて、婚約をした仲だ」

「それは全面的に違う気がするわ」

「…………ご名答」

簡単にすると。

その私の親って人が私をここに放り込んで、私は記憶を失ったと。

一つ、いや、二つ三つふに落ちないことがある。

まずは

「ねえ。なんであんたずっと笑いをこらえているのよ」

第三王子のクロードと言う人物が、ずっと私の顔を見ては含み笑いをしているのだ。

「へ？ いや、なんでも…………ぷふふ…………あはははははははっ」

今度は盛大に笑い出した。

「あんた病人でしょうが。医者を呼んでくれた心優しい記憶がある頃の私に感謝しなさい」

「いやっ、記憶がある頃もそんなに優しくなか…っひ…はははっ」
「？」

「俺が暴露していいかわかんないけど…この女。ずっと猫っ」
「黙れ」

私は低い声で呟いた。

そしてベッドから立ち上がり、クロードのほうへ歩く。

そして耳元でささやくように優しい声で言う。

「今んとこあんたが一番私に詳しそうね。あとでゆっくり話し合いませんか？二人っきりで」

「………ハイ」

そのとき、なぜかレインが拳を強く握り締めていたが、特に気にも留めなかった。

私はクロードの耳元で呟く。

「あんたの知っている私の情報、他の奴にばらしたらあんたの噂あることないこと流すわよ」

「…き、肝に銘じておきます」

そして私はまたベッドに腰掛ける。

医師はなぜかレインの顔を見てはニタニタしていて気持ち悪い。そしてレインは無表情で私を見据えていた。

なぜだろう。

なぜかわからないが、彼の顔を見ているとなんかこう…ムカつく。

コイツ、私になんかした？

私がじーっとレインを見つめていると、彼は不意に複雑そうな表情になって目を逸らした。

「えっと……。私が一国の姫だったのなら、御付がいるはずよね？」

「ああ。いるよ」

「呼んでくれないかしら？」

私がそういった瞬間。

「お呼びですか？」

ガタッと扉が開いた。

「えっと……。いたのなら最初から出てきてくれれば良いのに」

「いえ。ちよっと面白そ……。じゃなくて大変入りにくい状況でしたので」

「あー今のであんたがどんな性格かわかったわ」

「さすがです」

「そこ褒めるところじゃないし」

私が言うと、彼女は医師たちに向かって

「これから乙女の秘密会議をするので男様は出て行ってください。
あと、他の人間…主に妃候補がこの部屋に近づくのを阻止してください
さいますか？」

「わかった。ではこれからお茶会を開くでしょう」

「感謝します」

彼女はレインと話して、すぐにこちらに向かってきた。

扉からジェルメという白衣とレインがでる。そしてクロードも出ようとするがガシッと彼女に腕をつかまれ

「あなたは今日から乙女です。一緒にお話ししましょう」

「主人も主人なら御付も御付だなあおい！ジェルメ助け…」

「グッドラック」

「幸運をつて……ジェルメの薄情者おおおおおっ！」

クロードの叫びと同時に扉が閉まった。

記憶喪失（後書き）

健忘症とは、医学的に言う記憶喪失のことらしいです。

尋問

「で？　どこまで知っているのですか。ルキア様のことを」

レイナは笑顔で問いました。
それにクロードは脅えるように答えた。

「べ、別にあんまり詳しいことはしらねーよっ」

「そんなことは聞いていません。彼方はルキア様のなにを知っているのですか？」

それはもう尋問…いや、拷問に近い笑みだった。

ニッコリと綺麗な顔で飾られる彼女の笑みは、目が笑っていない。

しかしその笑顔を前に脅えるようにしていたクロードは、急にまじめそうな顔立ちをした。
黙っていれば美形な男だ。

彼はまじめそうな顔をして、レイナに答える。

「なにも……知らない」

それはどこか悲しそうで、悔しそうだった。

それにレイナは満足そうに笑んだ。今度は目元が少しだけ笑っている。

そして「ま、当然でしょう」と続けた。

「今日言葉を交わしただけの若造がルキア様のことを知るにはかなりの努力が必要ですからね。どこぞの誰かさんみたいに」

本当に楽しそうに彼女は言う。
なんの話だろうか。

「それよりもさっき、あんたはなにを話そうとしていたの？」

私はクロードに問う。

すると彼はポカン、としてから笑い出した。

「は…ははっは！ お前わからずに俺にすごんできたのかよ？ あは

ははっ、なんだ、案外鈍いじゃないかっ！」
「……………」

なぜだか知らないが、とてもイラつく。

レインという男を見たときもそうだった。
奴を見ているだけで、存在するだけでなぜかイライラして、心が押しつぶされそうになる。

これはなんだ？

イラつく、という感情だけではない気がするのだ。

不安、苛立ち、嫌悪、忌嫌、悪感。

たくさんの方の感情。

これが「生理的に受け付けられない」という感情なのだろうか。

だが、私が思う方の感情以外にも、彼に抱く思いがある。

それはどういった感情なのか。

私は彼に、何を求めているのか。

記憶を失う前の私は、なにを思っこの選定に参加したのか。

それは、これから知っていけばいい。

なるべくなら早く、正確に。

「はははっ！ 俺が知っていたのは、ただお前が猫をかぶっている、というくらい、だよっふはははっ」

いまだに笑いこけているクロードが、息継ぎと笑いの間に答える。

猫？

なんのために？

まあ、今はまず

「どんなふうだった？」

「清楚でおしとやか。別に俺等の気を惹こうとはしなかった。むしろ距離を置いていたくらいだ」

前の私の印象について語った上で、彼は不満そうに口を開く。

「まあ、何を考えてか俺等の母上は王のいないすきを狙って開いた選定があるにも関わらず、隣国の権力差のあまりないお前を俺等三人の中の誰かの妃にしようと考えた。

母上は元から不思議な人だったが、今回のことも意味不明だ。俺たちの婚約相手ならもっと考えて選べばいいのに、なぜ選定など面倒なことをするのか。

しかし母上の命令に俺たちは逆らえない。従うしかないんだ……」

途中から彼の不満そうな表情はどんどん暗くなっていく。

ん？

俺等三人ってことは…

「三人兄弟？」

「ん、ああ。俺が一番下。さっきいた青い髪の人が二番目で、一番上にもう一人いる。本当は一番上の兄と一緒に部屋で過ごすはずだったんだよ、お前は」

「……………はあ？」

ため息のように私は息を吐きながら疑問を一言にしてぶつけた。

「母上がお前を俺たちに押し付けたんだよ。まあお前も無理やりされたようなものだったが。それで誰かの妃としてなるようお願い、一番上の兄が立候補したんだ」

「なんのために？」

「さあ？兄上の思っていることはよくわからない」

その適当な答えに、私は頭を悩ませた。

その隣ではレイナが楽しそうに笑っていたが、ここは気にしては負

けだと思う。

意味不明

あれからすぐにクロードは部屋を去り、レイナも（笑いながら）自分の身支度の準備をする。

と、そこに飛んできた一羽の白い鳩。

「あ、ルウ」

レイナはニッコリほくそ笑いながら、鳩の首からからテガミを取り出した。

そこには小さめの真っ白な紙が挟まれていて、彼女はそれを開いてはさらに微笑んだ。

もちろん奇妙に。

すると彼女は私に「ルキア様のお父上、リフエエラ国の現王からのお手紙です」と言いながらテガミを渡した。

その中を見ると

『婚約おめでとう』

の一文。

「…………死ねば良いのに」

なぜか口からそんな言葉が出ていた。

しかしこのテガミの内容で私の父と言う人がどんな人なのかわかったような気がする。

きつとろくでもない人なんだろうな、と心の隅で思った。

私はそのテガミに二枚目があることを知ると、王からのテガミを布団の上において、二枚目のテガミを読んだ。

『ルキア様が結婚したと聞いて正直驚いてます。嬉し寂しいです。

しかし貴女がそれで幸せなのであれば、我等は精一杯応援します!!

ま、その話は置いておいて。

最近、五階級の血筋だけの奴等が裏でコソコソと何かを始めているようです。

もしものために、一人で行動しないよう、気をつけてください』

五階級の、血筋だけの奴等。つまりは王や政治をよく思っておらず、

代々の血だけが本物の人たちが何かをたくらみ、私やその王という人を殺そうとしている？

勘違いだったらすぞ良かっただろう。

しかし、この文章を読んだ後から、私は少しずつ不安が降り積もっていった。

コンコン、と控えめにノックされる扉。

どうぞ、と返答すると、扉がゆっくりと開き、そこから金髪金目の、背の高い優しそうな雰囲気を持つ男が立っていた。

優しそう、といっても、どこか胡散臭い。

「君が倒れたと聞いてね」

「そりゃどうも」

私が冷たく促すと、彼は目を大きく見開き、一瞬でもとに戻した。そして徐々に距離を縮めてくる。

「記憶喪失って本当かい？」

「らしいですね。ってか近いんで離れてください」

「じゃあ、俺のことも覚えてない？」

「……………ストーカーですか？」

「正解」

「うわっ」

爆弾発言。

このそれなりに整った容姿をしている胡散臭い男はストーカーだった。

……………まあ、そんなわけないだろうけど。

彼は笑みを浮かべながら近づいてくる。

どこか、あの青髪、レインと面影が似ているところがあって、気持ち悪い。

「近づかないで下さい」

私は結構思ったことを口に出すタイプだったようだ。

彼はニツコリと笑みを作ったかと思うと、笑いをこらえだした。

「はは……っ、本当に記憶喪失なんだね……うっはは、まさか素の君がここまであからさまに嫌悪表現するとは思わ、なかった……くく……」

所々切れつつも、しっかりと言葉を最後まで言う彼。

そんなに嫌悪感出していただろうか。

そう思っレインナを見ると、彼女はいつもどおりの笑顔で自分の眉間に人差し指を当てた。

鏡を見ると私の顔の眉間にはシワがより、彼をよく思っていないことをあらわしている。

「まさか記憶喪失で初対面のはずなのにここまで嫌われるとは……」

彼は今もお笑い続けて、一人で納得し、そのまま部屋を出て行った。

意味不明。

嵐のような人物だ。

医者

金髪金眼の胡散臭い男が部屋を出て行ってから、レイナが伝書鳩を見てふう、とため息をついた。

「どうしたの？」

その言葉にレイナは笑顔を作って

「いえ、この伝書鳩は密入国なので」

「……………何故密入国なんてさせているの」

「ルキア様が『もしこの国の不利益になるような文面であつたらおそらく国に入ることも出ることもできなくなるだろうから、野生のハトとしてつかったほうが良い、大丈夫、ルウは賢いから』とおっしゃって」

「本当に私が言ったのかどうか疑問ね」

残念そうにため息をつくレイナはどこか芝居がかっており、不安感を私に抱かせた。

もしこのルウというハトが捕まったらどうするのだろうか？

私は、どうするつもりだったのだろうか？

そんなことを考えていたら、また勢いよく扉が開いた。

「嬢ちゃん」

みるとそこにはジェルメが立っていた。

手には医療器具があり、おそらく私を診察しにきたのだろうと予想がつく。

「今度は彼方ですか……」

ため息交じりに言うと、彼は苦笑して

「本当、性格悪いな嬢ちゃんは」

「お互い様。記憶喪失だった私にいきなり嘘吹っかけようとするあなたに言われたくないわ」

「もっと清楚で優しい人だと思ったのにな」

「嘘こけ」

「…………嘘だよ」

案外あっさりと認めたジェルメ。

今度はなにを言おうとしているのか、表情が嬉々としている。

「最初から性格隠しているなんて知ってたよ。

俺は有能な国一番の医者だぞ？

顔の筋肉の動きで相手の思考なんざ簡単に読める。まあ、難しい相手もいるがな。

レイン坊や他の男を騙せても、俺には最初から無意味だったな。

クロード坊が倒れたと血相変えて走ってきたときも、別にクロードの体調なんてどうでも良かったんだろ。

ただクロードが自分の部屋に寝ていて邪魔だったから俺たちに片付けさせようとした。

…………ま、今の嬢ちゃんに言ってもわからないだろうが」

全くだ。

記憶の無い女にそれ以前の話をしどうする。

しかし、これも医者 of 作戦かもしれない。

記憶のある頃の話をして記憶の扉を開ける。

この男は自然体でそういった行動をとれるのか。

さすがは国一番の有能な医者。

この男には不思議とレインたちに覚える嫌悪感はなかった。

「何も思い出してないわよ？」

「あー、そっか」

言うのとやりにくそうにジェルメは頭をボリボリとかいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7671u/>

姫の復讐の果てに

2011年11月6日21時37分発行